

[030/031] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339096>

出版情報 : 史淵. 30/31, 1944-04-10. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン :
権利関係 :

還暦の壽を迎へられた

長沼賢海前教授

長沼賢海前教授には昨年九月を以て還暦を迎へられ、九州帝國大學教授の職を退かれた。同時に先生は當九州史學會常任委員を辭せられたが、新に顧問として今後とも本會の發展のために御盡力下さることゝなつて居る。

顧るに先生は明治四十年十一月東京帝國大學文科大學國史學科を御卒業の後、間もなく文部省圖書課教科用圖書の調査、引續き同省通俗教育調査會に關係せられ、其後東京府立第一中學校教諭を経て廣島高等師範學校教授となり、大正十二年十一月より滿二ヶ年史學研究のために佛蘭西國・獨乙國・英國に留學を命ぜられ、其途上蘭領印度・海峽植民地・比律賓・伊太利國にも在留見學されることゝあつた。大正十四年十月歸朝せらるゝや直に入りて創設當初の九州帝國大學法文學部の教授となり國史學の講座を擔任せられて、爾來昨昭和十八年九月御退官に至るまで御在職十八年に及び、その間國史學科の確立並に九州史學會の創設と維持に盡瘁せられ、その高潔の人格と博洽の學殖とを以て本學の向上後進の育成等に盡された御功績は洵に甚大なものがある。

先生が學界に發表された著述及論文並講演等は主要なもの、みでも五十に垂んとして居る。特に先生は特殊題目としては日本宗教史を、時代史としては室町時代を専攻せられた。規鸞上人の研究を以て學界に發足せられた先生は宗教的史實を主客兩面から考察することによりその實相を極めんとされ、眞宗の研究、やがては中世に於ける神佛混合の神道に於ける佛教的要素の探究となり、最後に王法即佛法論の史的究明に及んで居る。之と併行して御歸朝後には切支丹、特に九州地方に於ける所謂離れ切支丹に關する詳細な研究を見るに至つた。又日本文化史に對してはその特色を海外文化の消化と征服にありとの見地に基いて聖徳太子論や鐵砲傳來論を生み、更に海外交通を問題として瀬戸内海を中心とする中世の豪族の活躍、國民の海上發展、曳いては壹岐・對島の史的研究、元寇、松浦黨の研究等となつたのである。就中海賊關係の史料の蒐集は膨大なものとなり、これは九州帝國大學研究室に委託されることゝなつて居り、先生の學統を受繼いでこの方面の研究を大成する者の出現が期待されて居る。これらの御研究を一貫して先生は常に考証學的立場に立たれ、その學問に徹して以て學界に貢獻された御功績は永久に朽ちないものがある。

尙此の他先生は公私各種の講習會に講師として臨まれ又縣教育會の指導者として、更に傍ら中學校女學校の教科書並に解説書を著し、本邦歴史教育の指導と普及に寄與せられたところ大なるものがあつた。

著書

一、日本宗教史の研究

昭和三年十一月 教育研究會

二、南蠻文集(編)

昭和四年十月 春陽堂

三、室町時代史(大日本史講座第五卷)

昭和五年二月 雄山閣

四、日本文化史の研究

昭和十二年七月 教育研究會

五、神國日本

昭和十八年一月 教育研究會

主なる論文

一、宗教一揆(岩波講座日本歴史十七の二)

昭和十年 岩波書店

二、吉野室町時代文化の特質・宗教(日本文化史大系吉野室町時代篇)

昭和十三年十月 誠文堂新光社

三、國史上より見たる國體と國民精神(教學叢書特輯第十三輯)

昭和十四年三月 文部省 教學局

四、元享釋書に就いて(本邦史學論叢上卷)

昭和十四年五月 富山房

五、元享釋書の精神(教學叢書第八輯)

昭和十五年三月 文部省 教學局

六、十七條憲法に就いて(日本諸學振興委員會研究報告特輯第

四編)

七、鎖國時代に於ける海外發展(日本諸學研究報告第十七編)

昭和十七年十一月 文部省 教學局

八、鐵砲の傳來に就いて

昭和四年十一月 史淵

九、伊曾保物語繪卷

昭和五年十二月 同上

一〇、宗教的土一揆

昭和六年十二月 同上

一一、元寇と神風

昭和七年七月 同上

一二、建武前後の神佛の信仰關係

昭和八年三月 同上

一三、元寇と松浦黨

昭和八年六月 同上

一四、法華念佛兩宗の展開と唯一宗源神

昭和九年六月 同上

一五、松浦黨の發展及び其の黨的生活(上・中)

昭和十年三月・六月 同上

一六、海外交通史上の壹岐

昭和十一年三月 同上

一七、懷良親王の征西路考

昭和十一年七月 同上

- 一八、神道に現はれたる他力念佛の影響
昭和十二年三月 同 上 三〇、大黒天及夷神再考
大正八年二月、五月 同 上
- 一九、鐵砲の傳來と其の普及
昭和十二年七月 同 上 三一、宗盲人別改めの發達
昭和四年十一月 同 上
- 二〇、元享釋書續考
昭和十三年十二月 同 上 三二、天滿天神の信仰の變遷
大正八年二月—四月 史 林
- 二一、門司關と門司氏
昭和十四年三月 同 上 三三、鐵砲傳來
大正三年六月、八月、十月、同四年一月 歴史地理
- 二二、筑前麻生氏について
昭和十四年七月 同 上 三四、布施屋の地名「フセ」
大正四年二月、三月 同 上
- 二三、嚴島附近の海上史(上、中、下)
昭和十四年十二月—同十六年十一月 同 上 三五、長尾氏と一向衆
大正九年一月、二月 同 上
- 二四、小早川氏の海上勢力
昭和十七年三月 同 上 三六、壇浦海賊と湊川合戦
大正八年四月、五月 歴史と地理
- 二五、親鸞と聖人論
明治四十三年三月—十二月 史學雜誌 三七、安藝門徒の一揆運動
大正九年十二月、同十年二月、三月、六月、七月同上
- 二六、蓮如上人
大正二年三月—十二月 同 上 三八、佛蘭西に於ける昔時の日本學
昭和三年一月 同 上
- 二七、ゑびす考
大正四年十月—十二月、同五年二月、四月 同 上 三九、眞宗の原始時代に於ける妻帯
大正十二年 龍谷大學論叢
- 二八、大黒天考
大正五年一月 同 上 四〇、時頼廻國の説を詳にしその信仰に及ぶ
大正二年五月 佛教史學
- 二九、倭寇とバハン船及寶船

四一、國史上より見たる聖徳太子と夢殿

昭和六年七月 夢殿

四二、佛法即王法論

昭和九年 日本精神文化

四三、水城の大樋の調査

昭和七年三月 福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書

四四、大野城及四王寺遺蹟

昭和六年三月 同上

(井上記)

第十四回九州史學會大會

昭和十八年度の九州史學會大會は五月二十九日(土曜)の聖福寺見學と同三十日(日曜)の講演會を行つた。

聖福寺見學

二十九日午後二時聖福寺本坊(博多驛の東北約二町)集合、同寺所藏品を參觀し、更に同寺内勾住庵仙崖堂に至り仙崖和尚遺墨を見學したが、來會者多く盛會であつた。左に本坊所藏品の展覧目錄を摘記し、併せて仙崖禪師の略歴及び三德寶圖説の序を掲げる。

聖福寺所藏

一、遺偈

一、三德寶圖

普門圓通禪師筆

仙崖禪師筆

一、いろは辨

一、詩七絶

一、與等夷首坐書

一、書

一、消息

一、開山千光祖師像
古頂相

一、普門圓通禪師像

一、仙崖禪師像

一、世尊分坐圖

一、三福神圖

一、竹圖

一、鶴龜圖

一、渡宋天神圖

一、日本橋圖

一、仙崖禪師涅槃圖

一、感得觀音

一、御書普門圓通禪師謚號

一、聖福寺世代住職自筆牒

一、古文書

同

同

同

同

小堀遠州宗甫筆

瀧本坊宛

筆者未詳

普門圓通禪師贊

筆者未詳

夜壇禪師贊

秋月秋圃畫

義山贊

仙崖禪師自畫贊

同

同

同

同

仙崖禪師筆

秋月秋甫画

仙崖禪師二川相近合贊

圓通禪師筆

一、聖福寺天文年中借家帳

一、仙崖禪師願書

一、仙崖和尚作夕曬硯

一、三寶銅印

一、仙崖和尚石印

一、獅子形扶桑最初禪窟石印

仙崖 禪師略歴

一、寛延三年 美濃國武儀郡谷口の農家河村家に生まる。

一、長じて上有知町滿泰寺にて薙髮し、空印和尚に師事す。

一、後に武藏國永田の東輝庵月船和尚に師事す。

一、天明三年鎌倉圓覺寺を始め諸方僧堂を尋訪して參考工夫す

一、天明八年（三十九歳）西下して筑前國聖福寺に、開祖榮西

より第百二十三世の法燈を受く

一、六十歳頃より書畫を始め

一、文化八年虚白院に隠居す

一、天保四年 石松元啓編「山里和歌集」に自作十餘首を寄す

一、同八年（八十八歳）十月七日入寂

一、同十二年仁孝天皇より普門圓通禪師の諡號を下さる。

尚、「三德寶圖說並序」と題し「此圖ハ扶桑最初禪窟ノ一百二

十三世仙崖禪師八拾一歳ノ時自作之文也云々」と後記された掛

三德寶圖說並序

道強名也。名其不可名。而况狀諸。蠢々萬物。

莫不全之受生。而民日用不知。則天示之以

河圖洛書矣。於此乎。伏羲氏。法之畫其八卦。

蓋非名與形。不能以垂教於天下後世也。其然

故。竺佛有字印形。日神有瓊鏡劍。名異質同。

三教所設。不期而然者。誠所以道之無二也。而

今所圖三德。仁爲之最。仁之至曰至善。至善

其庶乎佛之大悲。楚書曰。楚國無以爲寶。惟善

以爲寶。吾亦合三以爲寶。常用無盡者也

右下に神教、儒教、佛教の順序で説明あり

神 教

宗源齋元靈宗之道。與天地終始。而不

者。其惟吾神國乎。古紀曰。天照太神。以三種寶。

授天忍穗耳尊。神教經。明一心五心一寶三器。三

器之在一人之謂齋元。本邦之正道。而異域所

無。在八百萬神及官庶曰三德總之爲宗源。

儒 教

概同神教。而其不合。唯齋元已補教編。以五我

配五常。義依顯教。執相忘性。不取也。性以

樂記及孔子之說爲近。荀與孟非也

佛 教

華嚴論曰。無邊刹界。自他不隔毫端。十世古今。始終不離當念。教意可見。而今全依秘密三摩地。曼殊室利曰。吾及五佛。並一切衆生。心性一體。悉皆清淨。經曰。若依此義。而修現生成無上覺。雖然欲修之者。必求明師。親受其法。否則得罪。龍孟曰。是說三摩地法。於諸教中。闕而不言。大師曰。以常途淺略之義。不可作種種戲論。夫一大道。而岐跡於神儒佛。一辨三足之。而傳天下於無窮。誠吾日國也。然教有三世出世。性情所趣。亦不同焉。是以未學之徒。往々守封不通。亦宜哉。然其不同在跡。故正之以禮。其不異在本。故和之以樂。禮樂備而後。天下平也。若一開此圖。果見東海西海所出聖人。亦相顧一笑焉。是豈強人之說乎。道之自然也

講演會並びに研究發表會

同三十日午前九時より市内四幡町縣教育會館にて委員長長竹岡勝也教授の開會の挨拶の下に、午前中は有志の研究發表、午後

は講演が行はれた。

研究發表會

- 一、記紀と皇統史觀 片山 太郎氏
- 一、福岡藩洋學の性格 井上 忠氏
- 一、深江信溪先生と楠公精神 河野 房雄氏
- 一、カルヴインの肖像について 益田 健次氏
- 一、徳川家光の精神狀態について 王丸 勇氏
- 一、宋代の長生牛について 日野開三郎氏

講演會

- 一、宋明學の葛藤 九大教授 楠本正繼氏
- 一、清原家の家學と家風 九大教授 長沼賢海氏

晚饗會

午後五時より學士會館にて開催、食後、重松俊章教授より「支那史上に於ける我が國工藝品の評價」について興味ある研究發表を拜聽、會する者三十名に及び盛會であつた。

(井上記)

國史研究會

今回は本年度の卒業生の卒業論文中間報告を順次に行つた。

なほ六月には糸島郡雷山に史蹟探訪を行ひ、まづ大悲玉院にて國寶の木造千手觀音立像(寺傳清寶作と傳へ、丈高一丈五尺にて藤原時代のもの)開基清實上人坐像(高さ二尺三寸、身に法衣を纏ひ口を開き齒を露出す)並びに紺紙金泥醍醐天皇御宸

筆雷山縁起を始め繪旨、古文書、古書畫等を拜觀し、筭飯の饗應に預り、更に後に神籠石を見た。

十月には入隊學徒川宅孝之君の「奈良時代に於ける國家危機と神道」なる研究發表がなされた。

(井上記)

史學科卒業論文題目

國史科

一、虎關の思想史的研究

——國體觀念と佛法王法論——

上杉 邦雄

一、上代の政治狀態

——特に記紀編纂時代の考察——

片山 太郎

一、古事記、萬葉集に於ける歴史精神と文學精神について

古賀 平七

一、往生要集より教行信證への發展

渡邊 正氣

東洋史科

一、元代回鶻人の研究一節

島尾 敏雄

一、フイリツピンに關する支那史料の再檢討

辻 豊

一、釐金問題の一考察

森 道男

法文學部史學關係講義題目(昭和十八年四月以降)

國史、日本思想史

國史概論

長沼 教授

演習(愚管抄講讀)

同

演習(日本紀講讀)

同

上代文化史の諸問題

竹岡 教授

日本思想史概説

同

水戸學演習

同

西洋史

近古史の諸問題

小林 講師

演習(ランケ、「ローマ法王史」)

同

東洋史

印度・中亞古代史概説

重松 教授

演習(A)(唐代東西交通史)

同

演習(B)(清末支那外交史料)

日野助教授

吳越國史

同

漢書食貨志講讀

同

其他

西洋哲學史

四宮 教授

希臘思想史序説

田中助教授

近代精神と宗教との葛藤

佐野 教授

基督敎美術

矢崎 教授

諸子思想概説

楠本 教授

支那哲學史演習

同

南方佛敎史概説

千湯 教授

上代文學概論

近世文學後景論

六朝文藝論

英語史

中世英文學

十八世紀文學史

浪漫主義序説、自然主義時代

西洋法制史

日本法制史演習

政治史

日本經濟史

經濟學史

臨時講義

東洋倫理學史

日本佛教史

九州史學會例會

昭和十八年度の例會は長沼前教授還曆祝賀の晚饗會を兼ねて十一月七日(日曜)午後一時より九州帝國大學法文學部構外三長閣に於て開催、出席者五十名に近く盛會であつた。

講演會

一、東洋史上に於ける所謂南北對立に就いての一考察

日野開三郎氏

高木 教授

小島助教

目加田教授

豊田 教授

中山助教

進藤助教

小牧 教授

武藤助教

金田 教授

堀 教授

宮本助教

波多野教授

加藤 講師

花山 講師

一、日本紀の精神

長沼 賢海氏

推古紀二十八年の條に聖德太子が「天皇記。及國記。臣連伴造國造百八十部。並公民等本記」を録せしめられたといふ記事がある。この記録は蘇我氏の變に焼失したが、太子の御遺志は繼承されて行つたのである。即ち天武紀の條を見るに「帝紀及上古諸事」を録せしめたとあり、又古事記の上表文には「帝皇日繼及先代舊辭」を誦習せしめられたとあり、又日本紀私記の弘仁私記序には「帝王本紀及先代舊辭」を録せしめたとあるがこの三者は相一致するものである。日本紀と古事記の相違は實に本街道と別街道を歩むもの結果と思はれる。その記録体については太子の頃の物のみ列傳体の如きも必ずしも左様ではない。さて奈良時代に於ける大化改新の具体化された律令が太子の十七條憲法を元とする如く、記紀の編纂も太子の御編纂に始まると云ひ得るであらう。律令の制定、記紀の編纂、和漢の勅選歌集、華やかな佛教美術等はいづれも足並みを揃へて進んだもので、當時のわが國勢の一大發展を物語るものであつた。大化改新の根本義は従来の複民族的制度を廢し單一氏族となすこと、即ち一般氏族を根本氏族の中に抱擁せしめることにあつた。斯る時勢に採まれながら日本紀は成立したので、従つてこの時勢が本書の精神として現はれてゐる筈である。而してこれを最も明瞭に現はすのは弘仁私記編纂者の日本紀觀即ち「上起天地混淪之先二云々」にして「神胤皇裔指レ掌灼然」たらしめることであつたので、この點を最重要視したのである。換言すれば日本紀の

目指すところは民族一元の理想の歴史的根據をきづくことにあつたので、紀を見るに臣下の天皇への名分が隨所に述べられる所以である。斯る大理想に基いて日本紀が完成したのは養老四年で太子の御計畫以來百年を経てをり、その内容は三十卷及び系圖一卷とあるが、系圖は紛失したのであらう。これに續く五國史にわざ／＼日本と冠詞があるのは日本紀によつたのであらう。次に「日本」といふ稱號の所以を考へるに諸説がある。ま

づ東を意味するらしいといふが、その標準とするところは支那であらうか、それとも海であらうか。恐らく當時東亞にその勢力を逞しうしてゐた支那への對抗意識に基くものと思はれるので、斯る氣魄のもとに日本紀が編纂されたことを銘記せねばならぬ。然しこの結果として日本紀の表現には漢文めかしの著しい特徴が現はれたのは當然のことである。この漢文めかしのために日本紀の研究は非常に困難となり古事記の研究に比し立廻れを見るに至つた。當時のわが國の鬱勃たる精神を知るためには日本紀の徹底的研究こそ最も必要である。それには漢學への深い教養を持つ人の協同を俟つて、長期に亘る計畫のもとに大勇猛心を振ひ起して取掛らねばならないのである。(文責在記者)

○長沼前教授還曆祝賀晚餐會

講演會終了後直ちに引續いて催す。まづ竹岡教授の開會の辭あり、九州史學會の生みの親としての長沼先生の御功績を述べられた。替つて長沼先生の御挨拶あり、史淵發行當時の經營難について述べられ、本部より同誌三百部づつ買上げとなり漸く

經營が續いた事情を語られ、今後も更に同誌を研究發表機關として研究を續けたいとの御話があつた。次に竹岡教授より記念品代の進呈あり、長沼先生には委員を辭せられた後も顧問として御援助を仰ぐ旨を依頼された。

晩餐後金田平一郎教授より九州文化史研究所の狀況についてその現況の概畧及び同研究所に關する先生の御功績について述べられた。即ち同研究所は長沼先生の昭和初年よりの御業績を土台とし昭和九年八月、松浦總長の頃に豊田法文學部長のもとに經濟科の三田村教授、法科の金田教授の協同を得て設立せられた史料謄寫の機關であり、關係人員は創設以來の延人員十五名現在員三名、謄寫史料はこの十年間に平均一冊五十枚前後の冊子として千二百三十五冊に及び尙それ以前の長沼先生の御蒐集謄寫も加はる。その内容は備中乙島文書以外はいづれも九州であり、文書記録の他に地圖繪圖あり、時代は近世を主とし中世の物も或程度存す。これらは長沼先生の御主唱、御指導のもとに出來たので島津藩以外の主なる藩のものは大旨蒐集され、尙その中の對島史料は同先生と鏡山講師の蒐集によりその中の「嚴橋集」は石田良助氏の「九州法制史料」第一輯にこれを寫して採用してあり、以て本研究の意義を知ることが出來ると結ばれたのであつた。(井上記)

○研究發表會

- 一、徳川綱吉の精神狀態に就て 王丸 勇氏
- 一、水戸學「新論」に於ける經濟思想 學生 川中庄介氏
- 一、澠寒胡戲について、附、蘇莫遮の原義 重松 教授

史淵筆者別索引

(筆者は五十音順による、括弧内は輯號を示す)

青木義憲
三河一向一揆の研究(九)

有光保茂
博多商人宗金とその家系(一六)

伊岐須清
モダニズムの思想史的前提(一九)

井上以智爲
盧山文化の黎明(八)
盧山文化と慧遠(九)

井邊一家
章學誠の方志學(五)
海防論者としての魏默深(八)
噶爾丹侵入當時の外蒙喀爾喀(一九)

伊奈健次
中世に於ける社寺金融の特別低利率について(三)
本邦佛寺の高利貸利認可の根據について(一)
中世末期大湊海關の通貨について(三三)

太田等
サモア紛争——アメリカ合衆國外交史の一考察——(一九)

大村作次郎
一九〇七年に於ける英露協商の成立の研究(三・六)
最近帝國主義勃興の經濟的原因について(四)
セラエラ事件に對するセルビア政府の責任(七・八)
一九一二年の「ハルデーン派遺」を主とする英獨海軍關係(一・一〇・一一・一二・一三)

岡野平吉
グレイ内閣の選舉法改正に於ける上院議員任命問題(一五)

鏡山猛
元寇役恩賞地の配分に就いて(六)
日韓關係雜攷(二二)

日本書紀に現れたる百濟王厝に就いて(一五)
太宰府の遺跡と條坊(二六・一七)

日唐交通と新羅神の信仰(一八・一九)
我が古代社會に於ける幾棺葬(二二)
原始箱式石棺の姿相(二五・二七)

辛島重義
ライン小國制度とその運命(二六)

岸田勉
支那繪畫に於ける寫實思想の展開——五代を中心として——(二七)

河野福夫
水戸學と佛教(四)
後三條天皇の御讓位に就きて(一八)

河野房雄
ビスマルクと奥匈國內の獨逸族(五)
再保險條約不更新とホルシュタインの心境(八)

小林榮三郎
第一モロツト問題とフォン・ホルシュタイン(一四)
所謂ボイスツトの報復政策について(一六)
ヘーゲルの「ドイッ憲法」とドイツ的自由(一七)
ヘルデルの政治的關心と「人性書簡」(一八)
ブルフェンドルフの「ドイッ帝國政情論」について(一九)
自邦主義と系族——特にボイスツト及びダルヴイクについて——(一〇)

モツシエロシユの祖國愛と外國文化——特に「フイランダーの幻想」について(二二一)
 アーダム・ミユラーの世界史觀とゲルマニア理念(二三)
 ヴオルテールの上代フランス觀(二五)
 シャーフツベリの精靈論とその影響(二六)
 ユーリナウの「ドイツ帝國史」について——ドイツ國民意識の連續性に關する二考察(二八)

讚井鉄男
 十九世紀獨逸史學史の一齣——所謂「プロシヤ派」に關する一考察(二〇)
 マツチーニと青年イタリヤ(二二)
 テーヌと歴史(二九)

重松俊章

支那古代の物價調節策について(一)
 宋元時代の白雲宗門(一)附、更生佛教匯(一三)
 唐宋時代の彌勒教匯(一)附、魔教問題(一三)
 敦煌本還寃記殘卷に就いて(一七)
 魏略の佛傳に關する二三の問題と老子化胡説の由來(一八)
 支那古代史の一觀察(一九)
 支那三教史上の若干の問題(二一)
 宋元時代の紅巾軍と元宋の彌勒・白蓮教匯に就いて(二四・二六・二八)

島村保
 社會政策家としてのビスマルク(三)

庄野眞證
 唐沙門法琳傳について(一四)

竹岡勝也

ものゝあはれと出家——源氏物語の二考察(三)
 國學者としての増穂殘口の地位(三)
 近世復古主義の源流に就いての一考察(七)

新井白石の古代觀と神道觀(八)
 世界史と國民史——滯歐所感の一節(一三)
 浮世の成立(一五・一六)
 反復古主義者香川景樹(一九)
 漢代文様の雲崗石窟に於ける展開(二五)
 中世神道と慈通(二九)

田中友次郎

ビスマルクの對社會民主黨策(二〇)

玉泉大梁

室町時代に於ける貨幣の流通狀態(一)

筑紫頼定

顯孝禪寺趾に就いて(二)

長壽吉

法皇レオ十三世論の一端(二)
 オリヴァ以後(三)
 ケレタロの卵の由來に就いて(五)
 シレシア地領繼承の關係(六)
 侯國政治訓諭の一考察(七)
 生子信教に關するケルン評論(九)
 ホルシニ事變の前後(一〇)
 新尙古主義と三州問題の言論(一一)
 一八七八年基督教社會黨の地位(一二)
 ビスマルクの岐路と運命(一五)
 ビスマルクと七年危機(一六)
 ビスマルクと伊太利戰役前後(一九)
 一八六九年の羅馬問題に就いて(三三)
 論証史學のフアタリスムとギゾオ時代(三四)

鄭賢奎

ジュール・ミシュレの反教會思想(三一)

中井虎一
記紀の原始文化論的研究の諸問題に就いて(二五)

中江健三
嘉慶年間の英國の澳門占領について(一九)

長沼賢海
鐵砲の傳來に就いて(一)

伊曾保物語繪卷(一)

暗黒時代の宗教一揆(三)

元寇と神風(四)

建武前後の神佛の信仰關係(六)

元寇と松浦黨(七)

法華念佛西宗の展開と唯一宗源神(九)

松浦黨の發展及び其の黨的生活(一〇・一一)

海外交通史上の壹岐(一二)

懷良親王の征西路考

神道に現はれたる他力念佛の影響(一五)

鐵砲の傳來と其の普及(一六)

元享釋書續考(一九)

門司關と門司氏(二〇)

筑前麻生氏について(二二)

嚴島附近の海上史(二三・二四・二五・二六)

小早川氏の海上勢力(二七)

島津氏の南方交通——大迫文書に關する考察——(二七)

九州に於ける銅鑠(一)

中山平次郎

西尾陽太郎

世阿彌の能樂論に於ける基調的思想(二六)

西本壯吉
先秦に於ける王道論の展開(二二)

源平合戦と緒方氏の擧兵(二八)

服部哲郎
近世獨逸猶太族とハインリッヒ・ハイネ——ハイネの猶太思想を中心として——(二七)

原田文枝
禪一考(一九)

檜垣元吉
戰國時代の武家生活と學問——大内氏と毛利氏——(一八)

日野開三郎
五代の沿徴に就いて(一三)

唐河陽三城節度使考(一四・一七)

五代藩鎮の舉絲綢と北宋朝の預買絹——五代苛政の一面——(一五・一六)

唐代の閉糴と禁錢(一九)

神宗朝を中心として觀たる北宋時代の結繩(二〇)

唐代便換考(二二・二三・二五)

五代國圖の對中原朝貢と貿易(二六・二七)

渤海・金の建國と敦化地方の産鐵(二八)

元菴部の發展(二九)

本城説治
三代世表考——殷周始祖を中心として——(一五)

本田不二郎
義鑑時代に於ける大友氏(一九)

本村正一
清代社會に於ける紳士の存在(二四)

晚清洋務運動史論(二九)

益田健次
アウランジニ運動(七)

宮下 勝次

鎌倉時代に於ける起請文の成立とその性質(一三三)

武 藤 智 雄

イタリヤに於ける歴史記述の契機と展望(二四)

森 佐 利 直

北宋初期の便羅に就いて(三)
南宋四川の對羅に就いて(一〇)

安 河 内 博

若狭國太良莊の崩壊過程(一三)

山 内 晋 郷

安南史上の一政權としての土變(一一)

山 本 嘉 藏

福岡縣成屋形古墳について(共著)(二)

山 本 博

福岡縣成屋形古墳について(共著)(二)
彌生式土器論と北九州——細線鏤齒紋鏡の新古——(四・五)

九州史學會本年度委員

顧問

委員長 常任委員

常任委員

委員

書記

- | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 長 | 長 | 竹 | 重 | 日 | 鏡 | 小 | 讚 | 井 | 松 | 高 | 山 | 鈴 | 進 |
| 壽 | 沼 | 岡 | 松 | 野 | 山 | 林 | 井 | 上 | 垣 | 橋 | 口 | 木 | 藤 |
| 賢 | 勝 | 俊 | 開 | 三 | 榮 | 鉄 | 鉄 | 裕 | 正 | 正 | 國 | 康 | 海 |
| 吉 | 海 | 也 | 章 | 郎 | 三 | 郎 | 男 | 忠 | 裕 | 信 | 幹 | 正 | 海 |